龍について

林　巳奈夫

〔要約〕支那のシンボリックな動物の中、最も著るしいものとして龍があげられよう。そのシンボライズする内容、その起原等の研究において、図像的表現の研究に、従来大きな片手落ちがあつたやうである。そのやうな研究を行ふ場合、より古い起原に近い形を知ることが必須であらう。漢以前の容器、その他の遺物の上に、常識的に見て龍の類ひと考へられる動物が色々にとりつけられてゐるが、虎に似たものもあれば、何ともつかぬ怪物としか見えぬものもあり、その内から龍を見出すには、常識以上の、考古学の力が必要である。龍の（広くいつて、殷周彝器を飾る文様の）意義を考へる上の基礎作業として、龍の図像的表現の遡源を試みた。後漢代の碑、紀元前後の方格規矩鏡、前漢初の寿州出土鏡、戦国後半の金村遺物、春秋末の李峪出土品、それより少し時代の遡る新鄭出土品、と時代順に龍の姿を追及する。それから先は、頁数が切れたため収めえなかつたので、やや尻切れとんぼであるが、春秋末—戦国の龍の姿を明かに示しえただけでも収獲であらう。

序

従来龍について論じ、その起原を考へ或ひは殷周青銅器の文様のいくつかに龍といふ名前をつけて考察を加へたものは多い。然るに、今日龍といふと誰もが頭に思ひ浮べ、直ちにそれと認める龍の内、遡りうる最古のものたる漢代の龍から、図像の上で、更に時代を歴史的に遡つて研究する者のないのはむしろ驚くべきことである。綿密に、時代を追つて、漢代の龍から遺物の飛石を伝つて遡つてゆけば、我々の現在扱ひうる最古たる殷代に始まつて、漢代に到るまでの、支那動物文の内、どれが正当に龍と呼びうるものであるかが判明し、古典の龍に関する記載を参照すれば、

それらの殷周彝器の文様表現が何を意味したかといふ大きな問題につき解明するところがあるはづであり、逆にまた、文献の記載も、それだけでは十分具体的に意味の理会されないことがらが、遺物の方から明瞭になることもあるはづである。

幸ひ甲骨文に龍字があり、銅器動物文を参照することにより、この文字の出来た時代に、龍といはれたものがどのやうな形のものか明らかに知られるから、図像の上で漢より遡る一方ばかりでなく、また終点がわかつてゐるのであり、この方法は確実性を加へるのである。

ところで、一口に時代を追つて遡つてみるといつても、殷末から漢までの間に、遺物の編年といふひどい密林が横たはつてゐる。そして支那考古学を専攻する者にとつてもこれを切り抜けるのは並大ていのことでなく、従つてそこには魑魅罔両が跋扈してゐるといふわけである。殷より漢に到る銅器その他の遺物の一貫した編年については、細部において更に研究を進むべき問題が多い。然し、龍の系譜をたどつてゆくに差支へを来す程には未開でないのである。今は正面から編年の問題に取り組むことを避け、使用する各遺物の年代については、話を進める途中で、必要に応じて触れてゆくことにする。

本年三月梅原教授に提出した研究報告では、かかる方針で、まず図像的表現を研究し、次にそのもののシンボルとしての意義の解明を試みたのであるが、今は紙面が限られてゐるので、第一章図像、の前半しか収めえなかつた。残りはまた別の機会にゆづる。

図　像

一

字引の類をみると、一口に龍といつても色々の種類のあつたことがわかる。例へば説文に「蛟、龍の属なり、角なきを蛟といふ云々」「螭、龍のごとくして黄なり云々」等。更に経籍纂詁などをくると、漢代以降の学者が、もつと沢山の種類の龍を色々と解釈してゐるのを知る。これらの解釈の成立年代は明らかでなく、殷以降の現存遺物の内に、明確にそれとアイデンティファイしうる龍を見出すのは困

難であり、私の出発点たる漢代には、大体一種類の龍しか見出せないから、「龍属」といふ、より上位の概念から龍を扱つてゆく。

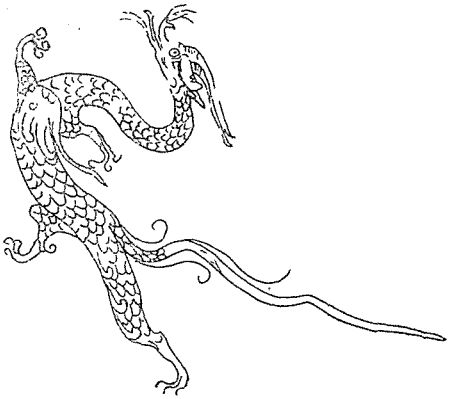
まづ漢代の、確実に龍と銘うたれてゐるものから始めて、それと同じ諸特徴を具へたものを、遺物の上で、順に時代を追つて遡つてみることにしよう。この場合、同時代遺物に現れるすべての例、およびそれに関係ある文様につき、イグゾースティヴに触れるのは避け、時代を遡る飛石として恰好であり、而も代表的であるごとき遺物を拾つてゆくといふ方法をとる。更にこの場合、龍のごとき支那古代の最も主要なシンボリツクな動物にあつては、時代、スクール、それが表現される材料等の制約により、それを表現するときの線、面、及びそれらの組合せからつくられる全体の印象は異なるにしても、全体的な内容の一部分をそれぞれ分担してシンボライズしたであろう身体各部の種目の組合せには、任意な改変が許されなかつたであろう、との想定から出発する。そしてこの想定の誤らないことは直ちに明らかになるであろう。（龍の羽状文化、唐草風雲文化については別の機会に触れる）

第一図は後一七一年に作られたことが明らかであり、而も木連理、鳳凰、等と共に、祥瑞の一つとして「黄龍」とその名が標記されている恰好の例である。

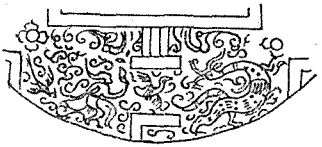
鱗でおほはれた細長い胴、頸。三本爪のある四本の足。前足の附け根に翼。頭は全体に長く、根本に鱗片様のものの表はされた角。耳。鼻の先には上向きの尖りがつき、長い舌がある。下顎はやや泐して不明である。尾の辺りに雲気様のものが渦巻いてゐる。（この類の龍の体から派生し、目、耳、鼻等とちがつて、自然の動物にその対応物を見出しえないものを、仮に羽根毛と名附けておく）

まづ、これが後漢代における黄龍といふものである。これと同じ龍は、略同時代の武梁祠画像石にも多く見出される。例へば、後室第五石三層[1]の肩に翼のある神人の騎つてゐる龍。ただ舌、羽根毛がなく、牙がある点が異なる。両城山第一九石[2]の絡んだ龍の頭には、舌と牙と両方ある。この龍は翼がない。等。画像石で他のどの龍をみても大同小異で、少しも特に変つた種類といひうるものはない。[3]

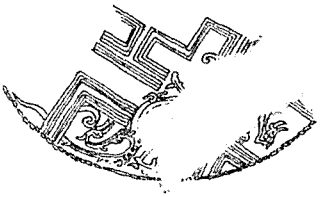
黄龍



1 $\frac{1}{12}$



2 $\frac{1}{2}$



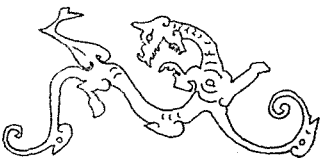
3 $\frac{1}{3}$

6 $\frac{1}{15}$

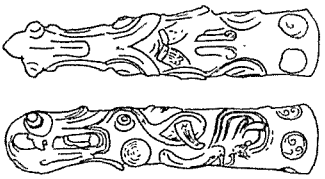
4 $\frac{1}{2}$

5 $\frac{1}{3}$

7 $\frac{1}{5}$

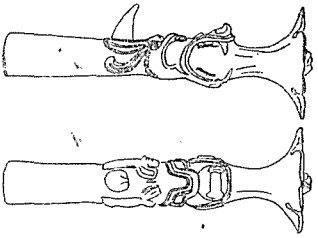


8 $\frac{1}{2}$

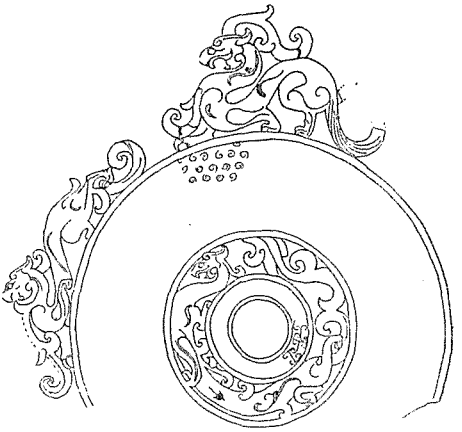


9 $\frac{1}{3}$

10 $\frac{1}{3}$

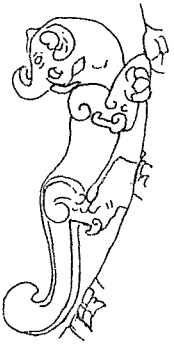


11 $\frac{1}{3}$

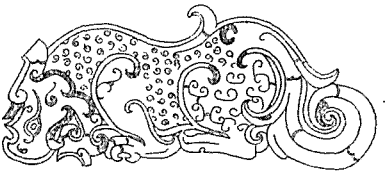


12 $\frac{1}{3}$

14 $\frac{1}{3}$



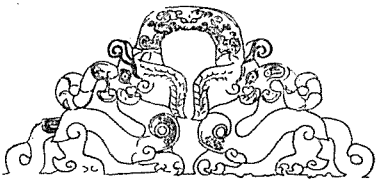
16 $\frac{1}{3}$



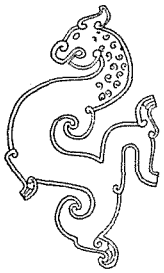
13 $\frac{1}{3}$

17 $\frac{1}{3}$

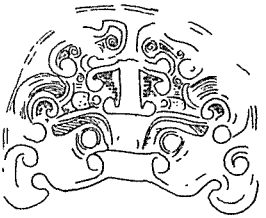
18 $\frac{1}{5}$



15 $\frac{1}{5}$



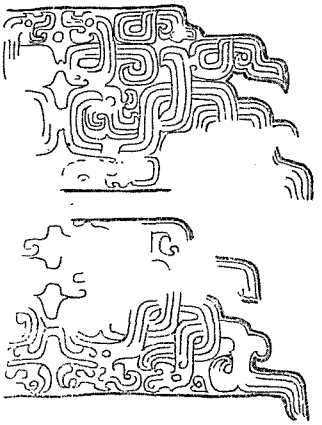
19　$\frac{1}{3}$



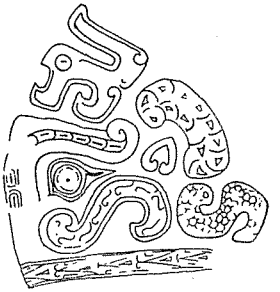
20　$\frac{1}{3}$

21　$\frac{1}{3}$

22　$\frac{1}{3}$



24　$\frac{1}{6}$



23　$\frac{1}{3}$

挿図出所

（図の縮尺は大約何分ノ一かを示す）

1 'Mission archéologique dans la Chine Septentrional.' fig. 167. 李翕碑裏面
2 「嚴窟蔵鏡」、二・中、三四、日熹月富四神規矩鏡
3 梅原末治「漢以前の古鏡の研究」図版二九
4 同右、図版二三ノ三
5 同右、〃〃二三ノ一
6 'Tomb Tile Pictures of Ancient China', pl. LXXXX; LXXXXI.
7 「漢以前の古鏡の研究」挿図一四（同図版一九ノ一）
8 同右、挿図一四（同、図版一八ノ二）
9 「増訂洛陽金村古墓聚英」図版七九ノ1
10 同右、図版七七
11 同右、図版九二ノ3、4
12 同右、図版一一七
13 同右、図版一〇八
14 同右、図版一一三ノ1
15 「支那古銅精華」彝器、一九七
16 「河南金石志賸稿」図二〇
17 「戦国式銅器の研究」図版二二、3
18 「商周彝器通考」下一四七
19 「増訂洛陽金村古墓聚英」図版一〇四ノ4
20 京大人文科学研究所蔵標本より
21 「戦国式銅器の研究」図版七八ノ2
22 「新鄭彝器」一〇三葉、立鶴壺の耳
23 同右、三一葉蟠夔文鼎一、足頭部
24 同右、二一葉

少し時代を遡ると、前漢から後漢にかけて行はれた方格規矩四神鏡がある。四神であるから青龍であるが、先の貴龍と全く同じ龍が數多く見出される。第二図はやや丁寧に表はされた例である。短い線と円で表はされた鱗ある長い胴、頸。四足。肩に翼、細長い頭、角、耳、尖りのある鼻、舌。下顎には鬚が下つている。どの例もさうであるごとく神人を伴つてゐる。

二

第三、四、五図は、梅原博士が郭沫若に同調せられ、前漢初頭位といはれる一類の鏡に見られる龍である。全体が込み入つた雲気紋のやうに表はされてゐるが、些細に視ると、身体各部分が見分けられる。第三図では、各処に渦巻いた羽根毛の生じてゐる細いうねつた胴及び尾、前向に二本、後向に一本の爪の生へた指を大きく開いている四足。裂けさうに大きく開いた細長い上下の顎。その尖端内側には牙があり、外側には渦紋状突起がある。耳の上には先づ後に向ひ、ついで上に巻く角様のものがある。根本に角らしい鱗片は表はされてゐない。第四、五図のものは、胴・尾は同様であるが頭が短く、角は短く、根本に鱗片様の線が表はされており、また頭の上から小さい羽根毛の派生する長い羽根毛が出てゐる。そして前足のみで後足はみえない。

第三図のやうな角と第四・五図のごとき角とによつて区別される二種類は、ホワイトにより[4]、前三世紀位とされてゐる空墳に一対として表はされている。(第六図) この空墳の人物を伴ふ方の龍と、第三図のそれとの一致は、頭の表現、角の形、胴の各処から出る羽根毛、足、爪の形において特に著るしい。ただこのものは、より大きなスペースが自由になつたためであらうが、胴には鱗様のもの、口には舌、牙以外の歯が表はされている。胴の各処、足の関節から出てゐる羽根毛が長くのびのびとしてゐるのもそのためだらう。前後の足は各一体づつで代表されてをり、また耳は表はされてゐない。下図の龍は第四・五図と同じく、根本に鱗片のある比較的短い角をもつが、このものは鏡の例と異なり、細長い顎をもつてをり、前後の足が具はつてゐる。前足の附け根からは、先に巾広い飾りのついた特に

長い羽根毛が出てゐる。

先の三・四・五図の鏡と同類の、菱形と渦文を基本とする細地文をもつ鏡に、平らなレリーフで禽獸文を彫絵的に浮き出させた一類がある。カールグレンはこれを前四世紀に置くが、大体その見当であらう。[5] この類と、先の第三・四・五図の類の地文を比べても、やや時代の遡ることが考へられ、また今のべた空塼に型捺しで表はされてゐる簡潔な鳥と、この類の鏡にみられるそれと、表現が共通であることも、この一類を今の空塼と略同じ頃、即ち戦国時代最後の百年位に行はれたものとして、ここに考察を加へることの妥当性が証明される。

第七第八図は、それから採つた例である。第七図、細長い胴。そこに一つ表はされてゐる円は、第六図のごとき表はし方の鱗のつもりかもしれない。尾の先は葉状の羽根毛で広くなり、途中が三叉鎗のやうになつてゐて、これは第三図の龍にもみられる。後足は二本に。前二本、後一本に広く開いた指。前足は一本で表はされ、肩には明らかに翼とみられるものがある。長い、開いた上下顎の内側には牙、外側には上下に尖つた突起。角の位置には兎の耳のやうな形のものがある。他の例と比較するとこれはC形のややくづれたものであることがわかり、またこれが、長く伸びて波打つた形になつたのが、第三図のごとき角であらう。第八図では、第六図のもの程よく発達してゐないが、細長い胴の随処に羽根毛がつき、四足。前足の肩から第六図下図と同様な細長い羽根毛が出て先に巾広い飾りがつく、連孤文を重ね合せたもので鱗が表はされる。前足の附根にやや大きな円のあること、第六図下図と共通である。頸はやや短く、牙、歯、鼻先の尖りは型のごとく表はされる。角が前向きなのは異例である。その他の例をみても、紋様としてより強度に、自由自在な美しい曲線、構図をもつて表はされながら、而も、体、足、頸、羽根毛、等主要なものは十分アイデンティファイされうるといふ事実に注意されたい。

そこで、今度は第九――一一図に挙げた洛陽金村出土品に移らう。金村のフンドをすべて同時代のものと前提し、これに同地出土と伝える鳳羌鐘の年代を当てはめることの

誤りは梅原博士のいはれるごとくである。[6] カールグレンは金村が韓の地であつたこと、驪羌鐘の年代、同地出土品にみられる銘文の字体、等より、このフンドを前四五〇年頃—二三〇年の頃としてゐる。[7] 今扱ふ遺物を文様の共通といふ方より、絶対年代の決る器と比較してみると、大体その辺に来る。第一〇図と略同式の、龍の鼻の頭に猛禽が躍びかかつてゐるテーマの金具[8]の下端、その他これらと同手法の金銀錯を施した多数の飾り金具に見られる菱形、又は矩形の内に、巾広い帯をもつて画かれた渦文を収める一連の文様についてこれを試みよう。（この文様は、梅原博士のいはれるごとく、獣面、虺龍文より変化したものとしてこれらより後出のものであり、後にのべるごとき、早い時期の所謂戦国式遺物には見られず、一時期を代表する文様の一つであることが、ここに取り上げる理由である）

寿県出土の楚王酓忎、楚王酓肯の銘ある器を含む、有名なフンドがある。[9] 後者を郭沫若は前者と同一人となしたに対し、唐蘭は「古人自らその名を書くに、決して、声近きの字の仮借を用ひて之を為るものなし」といひ、後者を忎とは別人として、孝烈王（前二六二—二三八）に当ててゐる。[10] 私は唐説をとる。この後者の銘ある簠には、金村のものと多少構成を異にするが、今問題の文様がつけられてゐる。また郭沫若が前三四二年七月に王となり、十月に殺された越の太子諸咎に当てた[12]越王者召於暘矛[13]下部の沈文の動物表現は、例へば藤井善助氏蔵の有蓋象嶺百獣壺[14]の動物と略共通であり、この壺の頸部には今とり上げた文様と見られるものがある。またやや違うがS字状にくねる動物の表現の或るもの、蛇を伴ふ鳥という特殊なモチーフにおいて、今の例とやはり共通性をもつ狩猟文壺（パリ、ルー氏所蔵品[15]のごとき）があり、これに現れると全く同じ弋射人物、鳥などが表はされてゐる黒陶の鏡[16]を含む黒陶明器の一群があり、これには、先の金村の金銀錯金具と同様、菱形に巾広い帯の渦文を収めた文様をつけた豆[17]が含まれてゐる。このやうにして、第九—一一図の遺物が、前四—三世紀に亙る時代のものであることが験されるのである。[18]

第九図をみると、ここにも龍がゐる。細長い顎。内側に犬歯及びそれより後方の歯。上顎の、大きな隆起した鼻孔

の後には伏せた葉状のものが後方に向つてやや持ち上つてをり、下顎にも同様のものがみられ、これは第六図の龍の上下顎の尖端の突起に相ひ当るやうである。眉の延長が耳になり、それを角が貫いて下後方に向ふ。角の根本の文様はやはり第六図の龍の角の鱗片にあたる。その後に、角のない、小さな、所謂虺龍が表はされてゐる。第一〇図も鼻の頭に猛禽が棲つてゐるだけで、前のものと同じ龍であるが、頭の後に孤を二つ連ねた第八図の龍の鱗と同じ文様が散在してゐて、この部分の頸部たることを暗示してゐる。第一一図は牙の後に草食獣のごとき歯がある点、第九図などと異なり、長い耳の下を通つて第六図の龍と同じ式の角が下後方に向つてのびてゐる。顔の後の輪廓はケバケバで縁どられ、第五図、第三図などと同じ表現である。

次に第一二―一四図の玉器を調べてみよう。これらの遺物の時代を考へるため、「増訂洛陽金村古墓聚英」図版九六・1の「嵌玉透虺龍文黄金帯鉤」を見てみよう。これの中に嵌めてある所謂虺龍の形をした玉は、今の第一二―一四図のものと同じテのものである。即ちどちらも弾力性に富む躍動した曲線。周囲を縁どる細い突帯の中には、細い、単純な、或ひは相交叉する並行線を容れた簡単な文様が散在するだけですつきりした感じ。そしてこの帯鉤の外框をなすのは、第九―一一図と同様、匕面を多く使ひ、同様弾力性に富む曲線で形造られた龍で、この写真の下部には、第九図と同じ顎、牙、耳、目、角をもつた頭部がみられる。金属部と玉部は共存するのみでなく、またどちらも、面の中に更に文様を一ぱいつめこむといふ繁雑な手法を用ゐず、面とその境界たる線を主とし、而も簡素とは凡そかけ離れた、力のこもつた。豪奢なものに作り上げてゐる点、両者の同時性が証せられる。[19]

第一二図璧の真上にゐるのは、S字形にくねつた長い胴、尾（先端欠失）四足（後足の一方欠失）鋭い牙をむき出し、口を大きく開いた短い頭。鼻の先は写真では不明。下顎には後向の尖つた突起。C形の角。胸の前に第六・八図に見られるごとき長い羽根毛（根本より短い枝）頭上には、第四・五図にあつたと同じ、枝岐れした羽根毛。といつた動物で龍たるの条件を具へている。その左下にゐるのも略同

様のものであるが、今の龍の頭上にあつた枝岐れした大きい羽根毛が胸の前に、胸の前にあつたのが頭の後にいつた、といふ形である。原石の制約によるのであらう。尻の先に短いのが一つ出てゐる。内側の環を三分ノ二周ばかりして、上の二匹と同じ龍がもう一匹ゐる。内側の環をふまへてゐる前足の後、腹と環の間にあるものは、第二の龍の胸の前にある枝岐れした羽根毛、頭と尾の間のスペースを埋めてゐるのは、最初説明した例の頭上より出ている羽根毛に相当するやうである。腹、尻にも短い羽根毛。スペース原材の制約により、羽根毛の位置、数に差があるが、身体各部の種目の面からみれば、ひとしく今迄ずつと追及してきた龍の属とみらる。

第一四図は、今と同じ龍を竪長のスペースに表現した例である。第一二図のと同じ短い頭。胸の前から出たやや長い羽根毛を咬み、背中、及び尾から分岐した羽根毛に、それぞれ前足及び後足を踏ん張つてゐる。尾は三つの枝岐れに、水をつけて撫でつけたような形である。第一三図の怪獣も、体はズングリ短いが、角、目の上の尖り、鼻の先下顎の先の尖り、牙、足、分岐した尾（鱗文が散在）腰の上の羽根毛、第六図のもの程発達してゐないが、足の関節から後方に向つて出てゐる短い羽根毛等と分析的にしらべてみると、これも第一四図と同じ身体各部の種目を具へてゐるのを知る。ただ太短い材料に収めたため、長い枝岐れした羽根毛がないだけ、といへる。

以上、この節では漢より一段遡つた時代の龍属を大体明らかにした。何だか、すべて龍属ということになつて了ふやうであるが、実際さうである。或ひは反問されるであらう、「第一二図など、やはり虎に似てゐるではないか」、と。龍属たる螭に、「虎に似て鱗あり」[29]といふ解釈もある。「では第一三図のやうに太短いのも、第一四図のごとく細長いのも同じく龍といふのか」と。龍は善く変化するもので「能く細能く巨、能く短能く長」といはれる。……このような凡そあてにならないような返答も、シンボルの章をまてばすべて納得ゆくように説明されうるものであることが明らかになるのであるが、ここではそこまで説明する紙面がない。

三

もう一つ時代を遡らう。第一五―一二図。李峪のフンドによつて代表される時期である。このものの絶対年代の一点を知る手がかりになるものとして、伝輝県出土の曷邗王壺がある。この壺を飾る文様が、李峪フンドで代表される一類の文様であることは一見して問題なく、この壺の動物形耳とそつくりの遺物が李峪から出てゐる。（第一六、一七図参照）イェッツ、唐蘭、陳夢家、孫海波の諸氏がこの壺の銘文につき、各自の解読を試みてゐるが、呉王、黄池、趙孟の三個有名詞、及び会盟のことより、これを哀公一三年（前四八二年）の呉と晉の会盟の事件を記したものとする点において一致してゐる。[22] 第一九図にみるごとき〇形の角をもつた龍の現れる例として、陳侯午𣪘がある。この𣪘の銘の「隹十又三年陳公午……」を陳桓侯午の一三年（前三六九年）となすに何人も異論はあるまい。[23] ところがこの𣪘は器腹に容庚のいふ竊曲文を飾つてをり、この文様の粗大な感じのものは、西周末から春秋にかけて盛行したもので、この器はいはば擬古的なものである。故に単純に、この把手のごとき龍の行はれた時代の一点として前三六九年を結論しえない。然し、この把手の作りは、前四八二年に一点を有する一類と同じ表現をもち、而も器腹を飾る竊曲文の、西周末以来のものの形式を襲ひながらも、線の性質に到つては流麗ないはば今様のものたるに異なり、把手には、過去のものとなり了つた形式を後世に真似る場合の、形式と表現のチグハグさは一つもみられない。故に多少の時代のずれは考へなくてはならないとしても、この形式の動物表現の三百年代に入つてからも行はれたことは、まづ考へうるのではないかと思ふ。曷邗王壺を飾る、上向花瓣形の中に羽状文を納れた文様は、呉王夫差鑑の、下向花瓣形に羽状文を納れた例と似てをり、後者は呉王夫差在位中（前四九五―四七七）に作られたもので時代も共通である。[24] 時代が遡る例として有名な厲羌鐘がある。従来のすべての考証[25]を検討した結果、私は現在前五五〇年説は動かないものと考へてゐる。この鐘は十分発達した典型的な戦国式（或は淮式）かといふと、二匹のS字形龍の絡み合ふ単位文様

は、例へば子璋鐘などのごとき形式的に少し遡る時期に例の多いものであり、獸面の下顎、胴など不規則なところがあり、それら単位文の間を埋める地文に、不規則な三角形、四角形、円などを画く渦文が目につき、これは、呂鐘[29]などやや時代の古い例を思はせるものがある。また禺邗王壺と同出と伝へ、またこれにあるのと相似た、獸面を中心に両側に胴の出る文様を有するストツクレ所蔵の鐘の相向ふ両龍の紐（第一五図）と同様と思われるものは、甚だお粗末な図しかないが[30]宋公戌鐘（宋平公〔前五七五—五三二〕の作）[31]にみられる。図が悪いのではつきりしないが、この鐘の鼓篆の文様は、ストツクレの鐘のごとき完成した所謂戦国式のものとは異なつて大まかであり、新鄭出土の鎛[32]を宋代の画家が画いたものを、何度も複刻したら、丁度こんなになりさうである。新鄭フンドが、形式的にも今問題にしてゐる時期より古いことは何人も認めるところであらうが、かかる類が、前六世紀中頃、或ひはそれより少し前に作られてゐたと考へられるのである。即ち、六世紀中頃、或ひはも少し前に、少くとも銘文で絶対年代のわかる器の上では、李峪フンドで代表される時期への過渡期があつた、といへよう。

第一五図は、伝輝県出土の鐘の紐である。ここに向ひ合ふ二匹の龍がゐる。くねつた長い胴と尾。尾には鱗が表はされ、尻の上には第一二、一三図のものと同様短い羽根毛がある。前足の附け根には羽根毛があり、先の丸く巻いたところが円で表はされる。前後の足の関節からは、第一三、一四、七図と同じやうに、後向きの羽根毛があり、足先に鋭い爪がみられる。上下の顎を一直線に近くなるまでに開いた口からは長い舌が下り、上顎には牙がある。鼻先、下顎尖端は大きく渦巻きになる。第一二図にあるごとく長い羽根毛が出てこれにも鱗状の文様がつけられてゐる。目の真下に丸つこいハート形の耳があり、それるぐるつと巻いて、縄のやうな文様のついた角が見られる。第二一図は一五図の龍と比べてみると、胴、尾、足、羽根毛、角、口、鼻の形、等すべて共通であり、牙を露はさず、翼のある点だけが異なる。頭上の羽根毛は伏せて頭に密着してゐるらしい。（第九図の角の後方にある一対の葉状のものも、こ

れと同じ羽根毛とみられよう）第一六図は第一五図の鐘と同出と伝へる禺邗王壺の動物形耳であるが、李岭出土の第一七図と酷似してゐる。第一七図の方が細部ははつきりしてゐるが、足がないゆえ、二一図と併せ論じよう。第一五図と較べると、第二一図同様、頸はやや短いが胴、頸に鱗文をもち、足の関節の後からは羽根毛。耳、角、鼻は第一五図と同じ。（第一六図では、巻いた鼻の尖端が遊離してゐる。形式学的にみれば、第一五図から一七図↓一六図↓一三図、といつた順で前節の龍の鼻の先の突起が生れたものと考へられる。下顎の突起も同様）第一五図の頭上の羽根毛は第一六図では明らかでない。第一七図では眉間から前頭部にかけて鶏冠状の鰭がある。舌の有無は銹でわからない。

第一七図の胴と第一八図の胴とを較べられたい。後者の尾は器の形の制約により、羽根毛のごとき形で附け足しになつてゐるが、何れも鱗をもち、全く同一である。後者の足は胴に張りついてゐる。足先に爪、足の附け根に羽根毛。頭にC形の角。第一九図の玉も、この系統の角をもつた例である。胴の左側突出部の左下及び胴から右に分れた大きな枝が足であり、爪が示されてゐる。頸の後、後足関節の後、及び尾からは羽根毛。

今のこの二例と同じ角をもつた龍が絡み合ひ、分枝した形で地文化したものが、この期の銅器に無数にみられる。特徴的な角、上下顎、羽根毛、舌、等、縷説することもあるまい。これについては後にまたのべる。

少しもどつて、先の第一七図、二一図の龍と、第二〇図の鼎の足の頭部とを比較しよう。上下顎、目、眉、角、その中に包まれた丸い耳、等の具合は全く同一である。角の上方、中央寄りにあるのは羽根毛であるらしい。「戦国式銅器の研究」図版五五の、鑑、所謂獣環を参考すればこのことはよくわかる。この羽根毛の下、眉間から額にかけてある、両側に渦文の派生する隆起は、所謂獣面にずつと残つてゆくものだが、第一八図の龍の、前頭部にあつた鶏冠状のものを、平面的に表はしたものである。

このやうな鼎の足の獣頭は、龍の頭部だつたのである。

四

第二二―二四図は新鄭出土品中、文様要素を共有し、確かに同時鋳造と思はれるものより採つた。これらが、大体前六世紀中頃、又はそれより少し前の時代のものであることは前節で既にのべた通りである。

第二二図は、第一八、一九図と同じ系統の角をもつた例で、壺に、第二一図と同じやうな具合につけられてゐる。前後の足。前足の附け根に翼。第一五図と同様、尻の先、前足の関節に羽根毛。頸、胴、尾には特殊な例だが、蟬文の様式化した文様がつけられてゐる。口からは、倒ハート形の角をもつた龍が出てゐる、といふか、舌がこのものに化してゐる。後足の附け根から出る羽根毛にも鳥頭がつく。

この例を橋渡しに、独立した龍形の系譜の探求は、角、鼻先、尾等がシヤボテンのやうにごてごてと更に龍頭或ひは鳥頭をもち、或ひは羽根毛を生んでゆき、或ひはこれに別の龍が絡み合ふ、といつた類に踏み込む。第二四図はその例である。図の左下の、右下を向いた頭から見てゆくと、額には退化した角。頭の真上から出る羽根毛はγ字形に交叉し、片方に龍頭がつく。胴をたどつてゆくと頭の真下に足。例のごとき爪をもつ。関節には羽根毛。上に向ふと上向の羽根毛を生じ、これに更に水平方向の羽根毛がつく。胴は矩形に一巻きして尾で終る。この尾にもう一匹小規模の龍が絡む等。かういつた龍が二匹背中合せになつてゐるのである。これは構図の一つの例であるが、かゝるシヤボテン的構成の龍が前節の時期に、細地文化した子孫を多く持つてゐることはいふまでもない。

第二〇図のごとき、龍頭を鼎の足の頭部に著けた例は、第二三図にその系統がたどられる。太い眉、目の具合。口及び鼻はひとつづきにS字形で表はされ、その右上にハート形の耳。これをぐるつと巻いたC字形の角。二列の鱗がつけられてゐるが、これは、六四頁に引いた鑑の龍頭にもみられる。眉の上に小龍を伴ふが、「戦国式銅器の研究」図版二四・6器足頭部龍頭の小龍を伴ふのもこの伝統であらうか。第一七図二〇図にあつたごとき、眉間の鰭は、二三図の例ではつきりしないが、同地出土の別な鼎には、

眉間に鍔をもち、鱗で飾られた角をもつ龍頭がみられる。[30]

なほ、第二〇図の龍頭には伏せてゐた一対の羽根毛は、「新鄭彝器」一〇四葉、立鶴壺の足をなす動物頭に立体的な形で見られ、これが更に複雑化したものと思はれる例は、同地出土の壺に附属する立体形動物に数多くある。

＊　＊　＊

新鄭の時期をきりに、一応この度は打ち切る。これから先の荒筋だけを述べておけば、漢代の龍から遡つて、第一七図―二〇図を通つて第二三図鼎の足の上部の龍頭に来た系譜は、西周末、厲王代の大克鼎[31]の足の上部の饕餮を通つて、真直に周初の「[illegible]作宝尊彝」銘ある鼎[32]の足の饕餮に到りつく。また二四図のごとき文様は、潞県辛村M3、M5、M25発掘遺物[33]のごときより粗大な類に系統をたどる。この一類は、西周末、厲王代の克盨蓋[34]、虢仲盨[35]、兮白吉父盨[36]、虢叔旅鐘[37]などにその胚胎期がみれるようである。この西周末―春秋前半の龍を例によつて身体各部毎に検討すると、頭の形、角、鼻の先の羽根毛、体のポーズなど、周初に伝統を引き[38]、それに相当する所謂饕餮その他、某龍と普通名づけられるもの、などが殷周初遺物に見出される。体の各部が頭をもつて龍化する現象は、厲王代の矢人盤[39]に、その胚胎がみられると思はれるが、そのやうな奇怪な表現が何故起つたかについては十分には明らかでない。

一方甲骨文龍字より、龍とは本来、所謂 Bottle horn をもち、饕餮と同じ頭の形をして、S字形にくねつた胴、それに足、鍔をもつたものであることを知る。[40]色々な姿勢、身体各部分各種の組合せをもつたものを、いかにして、やはり龍の属として扱ひうるかは、そのシンボルとしての意義の考察を俟たねばならない。

「註」

① 関野貞「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」図版一〇三

② 同、図版一二九

③ ここで注意すべきことは、楚辞、淮南子を夫々注し、各種の龍の形態について述べるところ多い王逸、高誘といつた人々が、日頃見てゐた龍とは、大体かかる単調な、略一類と見うるごときものであつたことである。蛟龍、蟠龍、応龍、等々とはいかなるものであるかについて、彼等は伝へられた知識としてのみ知つてゐたのではないかと思はれる。より古い時代の色々の龍につき、これらの注釈をアイデンティファイしてみようと試み

るとき、丁度うまくあてはめうるものが見出せないのは一面かかる事情に由るのではなからうか。

④ 'Tomb Tile Pictures of Ancient China', pp. 14—15. 氏のあげる理由は妥当と思ふ。

⑤ B. Karlgren 'Huai and Han' (BMFEA. no.13) p. 76 以下氏の論はあまりにもロヂカルに片附けすぎる難があるが。

⑥ 「増訂洛陽金村古墓聚英」七一頁

⑦ 'Notes on Kin-Tsun Album' (BMFEA. n. 10)

⑧ 「増訂洛陽金村古墓聚美」図版八〇

⑨ 梅原末治「戰国式銅器の研究」七一頁以下参照

⑩ 唐蘭「寿県所出楚器考略」(国学季刊、四ノ一、三頁以下

⑪ 「十二家吉金図録」尊、一七—二一

⑫ 「両周金文辭大系攷釈」補録、二頁

⑬ 同右、挿図三

⑭ 「戰国式銅器の研究」図版八三、八四

⑮ 同右、図版八七

⑯ 梅原末治「戰国時代の明器陶俑」(「東洋史研究」新一ノ一挿図一ノ一

⑰ 同右、図版一、下

⑱ 前五世記には、次節にのべるごとく、李峪フンドに見るごとき一時代古い文様が行はれてゐるのである。今例として引いた遺物に様式上の差異があり、従つて時代の前後も勿論あるはづであるが、現在のごとき学術発掘の現状では、地域差も十分にはわからず、時代の前後も百年を単位とする大雑把なものを以てする外はない。

⑲ 伝金村出土の玉の中には今とり上げた第一二—一四図のものとは明らかに異つた作行きのものがある。(増訂洛陽金村古墓聚英」図版一一二・5とか図版一〇七・3・4のごとき)これらは、体の内部の穀粒文が著るしく視覚に迫つて繁辱の感を与へ、頭部の表現においては、上下の顎の切れ目が並行線をなしてゐる点、先の類が顎を大きく開いて牙を露はし、その中が三角形をなしてゐるのと差異がある。体の内部を埋める穀粒文が更に跋扈してゐる例も金村にあり (W. Ch. White. 'Tombs of Old Lo-Yang', Pl. CXXXV. CXXXVI) 輝県M60 (郭宝鈞「古玉新詮」集刊甘本下、挿図三) のフンドはすべてこの式のものから成つてゐる。この類と第一二—一四図の類とは時代を異にすると見るべきであらう。(勿論中間式もあり、截然とは分けえない。第一二—一四図にあげた類は、この類より後出のものと思ふ。後述のごとく、前六世紀前半或はそれよりも前に属すべき新鄧のフンド中にこの類の玉があり、(関百益「鄭冢古器図考」一〇・一一)またこの類にある龍頭の側面観と見られるものの表現は、後述のごとく、前六—五の世紀の交に盛行した。李峪フンドで代表される一時期の銅器文様に現れるそれと共通なものがあり、今引いた輝県M60のフンド中には、口の間からコンマ状の舌を出したものがあつて、(郭宝鈞、前引、図版拾参、左上、即ち、挿図三、302.) これなどは、まさに今いつた

時期（及びそれより一段前の時期）の銅器文様に特徴的なものだからである。体の内部を半浮彫的な穀粒文、ハート形渦文などでぎつしり埋める手法は、動物文の体内を渦文で埋める銅器文様の表現と、同一志向の所産であらう。

ところで、今私が時代において先であると考へた式の玉が、先程本文において例として引いた黄金帯鉤と同じ製作の龍形の框に嵌められた例があるのである。（例へば、「増訂洛陽金村古墓聚英図版九八・1）これに嵌められてゐるやうな体をくねらせた龍形の玉が腰部、体の上部に佩びる佩玉として使はれたものたることは、輝県のM1、M75（郭宝鈞、前引、挿図四、挿図五）の例で明らかである。事実、この帯鉤に嵌入せられている玉は勿論、先に本文にあげた黄金製の框に嵌めた例も、たゞ帯鉤に嵌入するためだけに製作せられたとしたら不必要な筈の、糸を通すための小さい孔があけられてゐる。然らば、かゝる嵌玉帯鉤の玉は、本来佩玉であるものを、帯鉤に転用したのであり、従つて一時代昔の佩玉を飾りに使つて帯鉤に使つたということも十分考へうるのである。このやうな例があるために、今の黄金嵌玉帯鉤の例において、金属部と玉部の共存のみを以て両者の同時代たることを簡単に結論しなかつたわけである。

⑳ 一切経音義引韋昭

㉑ 説文、「龍」下

㉒ 銘「禺邗王于黄池為趙孟夯邗王之盠金台為祠器」

W. P. Yetts 'A datable Pair of Chinese Bronzes' (Bur. mag. 1937.

陳夢家「禺邗王壺考釈」（燕京学報」二一期（唐蘭の解釈は右論文の引用より知る）

孫海波「河南金石志賸稿」図二〇の考釈、

イェッツの釈は最も不備で、今の場合論外である。孫海波は唐釈に従ひ、最初の禺字を過と動詞によむ。然し「禺邗王の呉王たることは陳釈に精しい考証があり、私はこれを取りたい。孫海波の陳釈に対する異議は比較的薄弱に思はれる。陳釈は甚だ合理的であるが、あまりに息の長い文章となりすぎる点少し不安である。ともかく短く切つてよんでみても主語がうまくわからない。大変困つた銘文である。

㉓ 「両周金文辞大系攷釈」二一六頁以下

㉔ B. Karlgen 'Yin and Chou in Chinese Bronzes' (BMFEA. no. 8. Pl. VII に写真。観堂集林別集「呉王夫差鑑跋」「両周金文辞大系考釈」又一五五頁

㉕ 「戦国式銅器の研究」五（下）、注18参照。こゝに漏れたものはカールグレンの論文に引かれている。

㉖ 「善斎彝器図録」図一三

㉗ 宋代のかゝるお粗末な図を引くことについて、カールグレンの弁解、即ち、今日実物の残つてゐる例で現物と図を対比することにより、かゝる図の画を方の癖を知るやうになると、このやうな図も未経験な者が慢然と見る場合より遙かに多くのことを

語るものであり、思つた程危険の少ないものである、(Yin and Chou in Chinese Bronzes, BMFEA. no. 8. p. 88.)を借りておかう。

㉘「両周金文辞大系攷釈」一八五頁。

他に、叔夷鎛(「博古図」巻二二、五葉)秦公鐘(「考古図」巻七、九葉)の紐にもやゝ相似た龍の絡み合つたものが画かれてゐる。前者の銘文が、齊霊公(前五八一—五五四)代のものであることは銘文に明記があり、確かである。後者は、「丕顯朕皇祖受天命……十又二公」とあり、誰から数へて十又二公になるか決し難いのを、郭沫若が、「両周金文辞大系考釈」でこの鐘の、叔夷鎛と形制、花文が殆んどアイデンティツクなことより、襄公より数へて十二公、秦景公(前五七六—五三七)となして、叔夷鎛と時代を合せたのである。所が、両者の図はアイデンティクなのにかゝはらず、尺寸の記述により図をかいてみると、両者は各部のプロポーションを異にしてゐるのがわかり、叔夷鎛は紐が極く小さくて、秦公鐘及び図と全く合はぬ。どちらも「内府蔵」であり、長文の銘ある点が同じなので、何かの間違ひで秦公鐘の図を叔夷鎛の方に使つてしまつたのであろうか。ともかく図が間違つてゐるので、郭氏の秦公鐘及び同銘の毀の時代決定はその根拠を失ふ。疑はしい故両方とも使はなかつた。

㉙「新鄭彝器」上、一葉

㉚「同右、四一葉ウラ、この拓本では角がC字形に曲つてゐたか否か不明だが、四六葉の鼎左足の例では、C字形になつてゐるのがどうやらわかる。

㉛「両周金文辞大系図録」図編一六

㉜「有隣大観」玄一頁

㉝「濬県彝器」M3:四三、四五、五四、五九、六三頁;M5:九、三五、三七、三九、四九頁;M25:五六、六五頁参照。

㉞「支那古銅精華」彝器、一二二図。

㉟「十二家吉金図録」雪、一一。

㊱「巖窟吉金図録」上、一八図。

㊲「陳氏旧蔵十鐘」第九。

㊳S字形の龍について梅原博士が既に指摘される「支那の青銅器時代について」(「支那考古学論考」所収)、一五七頁。

㊴「両周金文辞大系図録」図編、一五一a

㊵甲骨文龍字(「殷虚書契前編」四・五四・三のごとき体。唐蘭が「天壌閣所蔵甲骨文字」で蟦と釈する字は別)は篆文龍字より、金文、古鉩文の龍、龔字を中介に断絶ない発展がたどられる。甲骨文龍字の、後に辛に譌変する部分が Bottle horn の象形たることは、殷虚書契前編」四・五四・一、「殷契佚存」九四二、「殷契卜辞」三四、の体をみればわかる。足のある例は「小屯」甲、三三五七にある。篆文で肉になる部分が、下顎の前或ひは後に巻いた龍頭の線的表現であることはいふまでもない。鰭は、「小屯」の今あげた例の背中に鈎形に表はされてゐるがこれが饕餮の鼻筋、龍属の背銅容器等を厳めしく飾る鰭の簡略な表現であることを今証明するには紙面が不足である。

and financial basis upon which the slavery was firmly established. Such a government, however, gave rise to the severe tension between the classes and they witnessed many colisions and civil wars since the latter part of the fifth century. Through these turbulent ages which gave statesmen sleepless nights the miyake was metamorphosed as well, until with the drastic experiments of the Sogas (蘇我) we enter upon a new phase of its development. The so-called Ritsuryo (律令) régime is nothing but the ages which were heralbed by such an iron hand of the great lord.

A Study of the Dragon

by

M. Hayashi

One of the most popular patterns of animal in ancient China was the dragon. But the studies in its origins and substance have heretofore made not a few mistakes. In such a study it goes without saying that we have to be aware of the nearest form to the original. On the pre-Han vessels and other remains, we find various kinds of dragon-like figures, but how can we distinguish them from other tiger-like monsters or from the will-o-the-wisps? Hence the archaeological methods become available and I attempted at the iconographical arrangement of dragons in order to be understandable to the significance of the ornaments on the bronzes of the Yin-Chou era. Mentions will be made one after the other on those remains: the stele of the Eastern Han, the mirrors with four sacred animals of cardinal points around the beginning of the Christian era, the mirrors from the Shou-Chou (寿州) district at the beginning of the Han period, the materials from the graves of Kin-ts'un (金村) in the latter part of the period of Warring States, the Li-yu (李峪) finds toward the end of the Ts'iun-Ch'iu era and the objects found at Sin-Ch'eng (新鄭) which belong to a little earlier period. Though I could not discuss more in detail in this brief essay, still it remains for me to confess my contentment that I have become aware of the form of the dragon during the Ts'iun-Ch'iu and those turbulent ages on the Continent.